

夏目漱石における「伝統」と「近代」：儒学・禅と 西洋思想の交わり

藤本，晃嗣

<http://hdl.handle.net/2324/2236001>

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：



氏 名 : 藤本 晃嗣

論 文 名 : 夏目漱石における「伝統」と「近代」 ―儒学・禅と西洋思想の交わり―

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は明治、大正期の小説家である夏目漱石の評論や作品の思想的背景を、「伝統」と「近代」の混合という観点から明らかにし、その意義を考察したものである。本論文において、「伝統」は明治期以前の東洋を中心とした思想を、「近代」は主に明治維新以後に流入してきた西洋を中心とした思想を指す。漱石が東西両文明に精通しているということは、漱石が生きていた時代から指摘されてきたことであり、研究の前提とされてきたと言える。本論文では、作品を含む漱石の文章を、関連する資料の文脈と対比させることを通してその背景を明らかにした上で、漱石の作品を「伝統」と「近代」という二つの流れが交錯する場と捉え、そこで新たにどのような創造が行われたのかを検討した。具体的には全体を二部に分け、第一部では「自己本位」における儒学の役割、そして第二部では禅と西洋思想との関わりを論じた。

第一部では、漱石の「自己本位」や、作品内における「自己（自我）の確立」といった問題について、西洋的な思想を受容しつつ、それらが儒学を中心とした漢学の影響の中でいかに変容していくかという点を問題とした。まず第一章において、書簡に書かれた「イブセン流」といった言葉に見られる漱石の文学の姿勢を問題にした。漱石が感じていたイブセンに対する親和性について、『社会の敵』(*An Enemy of Society*)を取り上げて検討し、イブセンの主張する「自己」を単に利己的なものとしてではなく社会全体を先導する意義のあるものとして捉えた上で、それゆえに生まれる孤独を自らの状況と重ね合わせたことが、その背景にあることを明らかにした。そしてそのような受容の土台となったのが、同じ書簡に書かれた「維新の志士」という言葉に見られる、儒学における「狂」の精神であることを指摘した。

第二章では『それから』を取り上げた。従来の研究において、主人公である長井代助は「誠」に代表される旧時代の日本の儒学的価値観を否定し、西洋思想を自らの考えの中心におく「近代的知識人」として捉えられてきた。しかし、小説の最も重要な場面の一つとも言える三千代への告白において、代助は「自己の誠」を強調しており、そこには他者への配慮など、西洋的な発想である「自己（自我）の確立」という観点からは捉えきれない意義が認められる。よって『それから』における「誠」の意義を再考すべく、その言葉のもととなった『中庸』を起点に、「誠」が儒学においてどのように理解されてきたのかを漢籍をもとに考察した。その結果『それから』における「誠」は、日本近世儒学の伝統の中で考察すべきものであり、代助の三千代への告白は、儒学的な「誠」の現れとしても解釈することができるものであることを明らかにした。そこから、従来の解釈において「近代的知識人」の典型とされてきた代助の根底には、伝統的な「誠」を中心とした倫理構造が見られることを指摘した。

次に第二部では、晩年の漱石の禅への関心をめぐって、その禅認識の内実を明らかにした上で、漱石の関心の背景にある西洋思想の文脈、またそれにより新たに発見され創造される禅の意義を考

察した。まず第三章において、漱石の評論や作品内の禅に関わる文脈を『禅門法語集』の文章と対比させることで、漱石の禅認識を検討した。本章では、『禅門法語集』が漱石の禅に関する記述、特に悟りに関わる描写に大きな影響を与えていることを明らかにし、その認識が禅において「宗門第一の書」とされる『碧巖録』にまで遡れることを指摘した。

第四章では、漱石の禅認識の転換点と考えられる『行人』「塵勞」篇の長野一郎の禅的世界への希求を問題にした。「塵勞」篇で語られる「香巖擊竹」の挿話を、漱石が参禅以来向き合ってきた公案「父母未生以前」に対する一つの帰結として考え、禅の公案の意義から「塵勞」篇の禅に関わる描写を考察した。その結果、「塵勞」篇における禅的文脈や一郎の苦悩が禅の公案の「言葉」に関する考えに沿う形で語られていることを明らかにした。特に「香巖擊竹」の挿話は、これらの思想をもとに語られたものであり、近代の諸問題に抗する思想として禅に期待する漱石の姿勢を読み取ることができると考えた。

第五章では、それらを受け、漱石の禅への接近の背景を西洋思想との関わりから検討した。一郎は「然し何うしたら此研究的な僕が、実行的な僕に変化出来るだらう。」という言葉に見られるように、「研究的」であることを否定し、「実行」を求める人物である。この一郎の希求が、漱石の講演「中味と形式」で語られる「観察者」は「内部へ入り込んで其裏面の活動からして自から出る形式を捉へ得ない」という問題意識と同型のものであることを指摘し、「中味と形式」の背後にW・ジェイムズ、H・ベルクソンの思想があることから、一郎の希求をジェイムズ・ベルクソンの哲学から捉え直す必要があることを主張した。具体的な例として、禅の思想が、特にベルクソンの主著『時間と自由』(*Time and free will*)で展開された、「言葉」が「根底的自我」を捉えられないとする主張と結びつき新たな意義付けのもと漱石の中で再評価された可能性を論じた。

以上の考察をもとに、近代日本の大きな課題の一つである「伝統」と「近代」の問題に、漱石の評論や作品がどのように向き合うものであるのかを明らかにした。